富大考古通信
第6号

再調査・再評価で見つかった「万葉集木簡」

2008(平成20)年は、「万葉集木簡」の当たり年だった。「万葉集木簡」とは、『万葉集』に収録された「歌」の全部又は一部が記載された木簡のことだ。『万葉集』とは、よく知られているように全20巻からなり、総計4,530余首が収録されている。一方、木札などに文字を記した木簡は、全国の遺跡から10万点以上が発見されている。だからこの両者が組み合う「万葉集木簡」が、多数発見されていても決しておかしくないのだが、不思議なことに2007年まで、1点すら確認されていなかった。ところが2008年5月に1点目が確認されると、その後を追うように発見が相次ぎ、年末には3点を数えるまでになった。

最初の例は、聖武天皇「紫香楽宮」の跡とみられる「宮町遺跡」（滋賀県甲賀市信楽町）からの発見で、「あさかや」と「るやま」の文字が読めた。そこから『万葉集』巻16に収録の歌「安積香山　影さへ見ゆる　山の井の　浅き心を　我が思わなくに」が復元された。木簡の年代は、宮の存続時期などとも考え合わせ、万葉集の成立時期よりも少し遡る8世紀中頃という。だから「万葉集」に収録された歌だから木簡に書かれたのではない。広く知られていた歌だから収録されたのであろう。

もう一つ興味深いのは、この木簡が出土したのは、すでに10年ほども前のことで、その反対面に書かれた「難波津の歌」のみが報告されていた。大阪市大の栄原先生（日本古代史）の再調査によって反対面の「万葉歌」がようやく日の目を見たのだった。

２つ目の木簡は、奈良県明日香村「石神遺跡」の出土品だが、これも実は5年前に出土していた。縦書きの場合、普通は右から左へと行が進むので、その逆の本例を当時は「万葉歌」と気がつかなかったのだ。これを今回、筑波大学大学院の森岡准教授（日本書道史）が再評価し、『万葉集』巻7の「朝なぎに　来寄る白波　見まく欲り　我はすれども　風こそ寄せね」と復元したのだ。遺跡の年代が7世紀後半だから、木簡もその頃で万葉集の成立より50年以上も古いことになる。

３例目は、京都府木津川市「馬場南遺跡」の木簡で、これは2008年10月発見の新史料だ。そこからは巻 10 に収録の「秋萩の　下葉もみちぬ　あらたまの　月の経(へ)ゆけば　風をいたみかも」の歌が復元された。調査した京都府埋蔵文化財調査研究センターは、一緒に出土した土器などから8世紀後半頃の木簡と判断している。万葉集が編纂された年代とほぼ一致することが面白い。

このように「万葉集木簡」の内の2例までもが、再調査・再評価を経てようやく世に知られることになった。今回の再検討がなければ、まだまだ学界に知られないまま放置されているのだ。それを考えると、発見者の功績を讃えるのは当然だが、既発表資料に対する再検討・再評価の必要性が再確認できたことも重要である。これは文字史料だけではない。土器や石器等の考古資料でも同様だから、埃をかぶった小さな「遺物」もそうむやみに扱えないという、当たり前のことをあらためて認識した次第である。

それともう一つ今回の「万葉集木簡」で考えさせられたことは、考古学研究者と万葉学者との立場の違いだ。石神遺跡の木簡を再評価した森岡先生は「万葉集収録の歌とは文字が一部異なるほか、脱字もあり、書いた人のなまりなどが影響している」と、新聞にコメントしている。私ならいささか異なり「後年の写本しか残らない万葉集収録「歌」の、古いかたちを探る大きな手がかり」と考える。なぜなら、写本より50年以上も古い木簡に「なまりや脱字」があるとするよりは、写本の方が間違っているのでは？と疑うのだ。考古学では古い方を重視するのが一般的だ。今回の問題では、おそらく万葉学者の方が正しいのであろうが、学問分野によって基本とするものにいささか違いがあることに気づかされた次第である。

（黒崎　直）

目次

再調査・再評価で見つかった「万葉集木簡」　黒崎　直

修士論文要旨
「北陸における古墳時代中期の政治構造」
高橋彰則
卒業論文要旨
「弥生絵画の伝達について—唐古・鍵遺跡、清水風遺跡中心論の検討—」
坂田裕之
「栃谷南遺跡における瓦生産とその工人」
佐藤雄太
「弥生時代における祭祀の地域差～長野県の青銅製祭祀具を中心として～」
高畑郁美
「学校教育における考古学の活用—北陸における教育施設の実情をもとに—」
細丸善弘
「越中国の戦国期城下町—富山県西部を中心とした戦国期城下町プランに関する考察—」
増永佑介
「古代の音楽—出土琴の使用目的を中心に—」
松木綾子
「八尾焼流通の様相—珠洲焼との比較を中心として—」
村上　直
「X 把手付土器の伝播とその背景—唐草文系土器圏以西を中心に—」
横幕　真

修論・卒論発表会と追いコンのお知らせ
編集後記

修士論文要旨

北陸における古墳時代中期の政治構造

高橋　彰則

本研究ではまず近藤義郎、都出比呂志、和田晴吾の古墳時代政治構造を検討した。三者ともに部族連合段階から身分制の発達した段階への移行について古墳時代を中心に考察している。

筆者も古墳時代のいずれかの段階で部族連合社会から、より身分制度の整った中央集権的政治構造に移行したと考えている。筆者は以前、北陸における大型円墳と帆立貝形古墳の出現とその意味について研究を行った中で、畿内勢力の強い影響の下で中期初頭に大型円墳と帆立貝形古墳が北陸各地で増加していったことを示した（高橋 2008）。

本研究では帆立貝形古墳や大型円墳の位置付けと甲冑副葬古墳の展開から古墳時代中期における政治構造について考察した。その結果、古墳時代の政治構造において中期初頭と中期後半の二つの画期が有ることが判明した。中期初頭段階は前期までの中層階級の首長に対しては帆立貝形古墳や大型円墳といった墳形や葺石や埴輪といった外部施設を用いて、下層階級の首長に対しては帯金式甲冑という石製腕飾類に代わる新しい威信財を配布するなどして取り込んでいった時期と言えるだろう。中期前半段階には小型円墳を中心に帯金式甲冑を配布し篤く遇していた。しかし中期後半段階には前方後円墳や大型帆立貝形古墳には上位の甲冑セットを配布し、小型円墳や小型方墳には下位のセットを配布するようになる。中期後半段階では中期初頭段階から取り込んでいった中・下層階級に加えて前方後円墳を営む階層を設定し、それらを序列化・組織化していったと考えられる。また、中期後半段階の前方後円墳・大型帆立貝形古墳・大型円墳は朝鮮半島系の副葬品を持っていることから、序列化の基準となったのは朝鮮半島諸国との交渉における功績であったと推測される。この二つの過程を経て前期までの部族連合社会から制度的身分秩序によって序列化・組織化された中央集権的な政治構造に移り変わったと考えられる。

従来の研究では後期における各地域の大首長墳や中小首長墳の衰退と後期群集墳の成立をもって中央集権的政治構造の成立としていたが、本研究では中央集権的政治構造の成立過程と成立時期が中期初頭であることを明らかにした。

卒業論文要旨

弥生絵画の伝達について―唐古・鍵遺跡、清水風遺跡中心説の検討―

坂田裕之

現在全国で絵画土器は400～500点確認されるが、奈良県田原本町に所在する唐古・鍵遺跡で130点、清水風遺跡で50点以上が確認されるため両遺跡が絵画土器の中心地と位置づけられている。しかし、両遺跡の圧倒的な数で中心地と位置づける事は容易であり画題の分布に関しても明確ではないため、絵画土器の分布を調べる事が重要であると同時に両遺跡が中心地であるかを判断する事ができると考えられる。

そのため、報告書を中心に全国の絵画土器の集成を行い、出土数と画題からそれぞれの全体的な傾向と各地域別の傾向を把握する事にした。また、画題形態についても各画題で形態分類を設定し分析を行った。

分析の結果、両遺跡の出土数が奈良県の大半を占めるため奈良県の傾向と位置づける事にし、出土数・画題・画題形態で以下の事が分かった。

・出土数ではⅡ・Ⅲ期は大きな傾向は現れないが、Ⅳ期では奈良県が圧倒的に多く奈良県から周辺に位置する地域程出土数が少なくなる傾向が現れる。Ⅴ期では奈良県での出土数が減少し圧倒的な地域が存在せず比較的出土数が多い地域が点在する傾向が現れる。

・画題ではⅡ・Ⅲ期では各地域で画題構成が異なるが、Ⅳ期では奈良県周辺地域と奈良県で画題構成が共通しⅤ期になると人物・魚などが同様に確認できなくなるため、奈良県のモデルが伝達される事が言える。また、Ⅴ期で奈良県の画題構成は周辺地域ではなく比較的出土数の多い地域で共通する傾向が現れる。

・画題形態ではⅣ期に奈良県の建物形態が全国の建物形態と共通する事や奈良県周辺地域でほとんどの画題が奈良県の形態と共通するため奈良県が大きな影響を与えていると言える。しかし、山陽・四国の鹿、山陰の魚・船、九州の画題形態は奈良県と異なる形態であり、奈良県周辺地域の山陰・東海・北陸では単線形態が目立つ。Ⅴ期になると奈良県の形態は鹿だけが周辺地域と類似するが、比較的出土数の多い地域で共通する鳥や人物の形態が確認できないためⅣ期のような影響はないと考えられる。

以上の事からⅣ期は両遺跡が絵画土器の中心と言えるが、Ⅴ期では両遺跡が絵画土器の中心ではない事が言える。

Ⅳ期に絵画土器が増加する原因として北部九州の脅威から共同体を安寧させようとした事が考えられ、山陽・四国は平形銅剣を用いるマツリが展開する事、山陰は海との関わりが強い事、九州では首長制が展開される事、山陰・北陸・東海では高地性集落が少ない事が画題形態の異なる原因と考えられる。Ⅴ期に全国的に絵画土器の様相が一変する理由として首長霊信仰を含む祖霊信仰の重視と考えられ、各地域に点在する事は各地域が拮抗しあう時代性を物語っていると言える。

栃谷南遺跡における瓦生産とその工人

佐藤雄太

本研究では，270 点以上の軒丸瓦を含む 4000 点以上の瓦が出土した栃谷南遺跡の瓦生産やそれに携わった工人について考察したものである。

栃谷南遺跡は，2 基の瓦陶兼業窯をはじめ炭窯，土師器焼成遺構，井戸などの遺構が検出された。出土遺物は瓦，須恵器，土師器，土馬，土製権衡などの他，鉄滓，透彫り製品などが出土している。

出土した瓦について，軒丸瓦は瓦当の彫り直し前は丸瓦の先端部は未加工で丸瓦の接合は瓦当裏面に着くもののみが確認された。，彫り直し後では丸瓦の端部加工は未加工，凸面加工，凹凸両面加工，瓦当部と丸瓦の接合は瓦当裏面より深く入るもの，瓦当裏面に着くものが確認された。

焼成は彫り直し前の方が良く，彫り直し後では瓦当と丸瓦の接合の方法が彫り直し前と違うものになると焼成は著しく悪い。

彫り直し前は 1・2 号窯周辺に分布しているのに対し，彫り直し後になるとほとんどが 2 号窯に分布している。

これらのことから栃谷南遺跡では，まず 1・2 号窯で瓦生産を行い，瓦の生産はある程度統一的に管理されたものであったと考えられる。その後 1 号窯付近で軒丸瓦が見られなくなるのは，1 号窯の不具合により改窯したためで，2 号窯のみで瓦を焼いたとした。彫り直しが行われた後は瓦当部と丸瓦との接合技法の多様化や平瓦の側面調整とその焼成不良品の関係から指導者的な人物がいなくなったと捉えた。そしてその指導者の行き先は国分寺造営に際するものではないかと推測した。

弥生時代における祭祀の地域差～長野県の青銅製祭祀具を中心として～

高畑郁美

長野県からは青銅製祭祀具として銅鐸や青銅製武器などが確認されており、出土数は少ないが種類は比較的豊富である。しかし、青銅製祭祀具の出土は北信から中信地域に偏りが見られる。このことから、弥生時代における祭祀の地域差について長野県の青銅製祭祀具を例に考察を行った。

長野県内の青銅製祭祀具の地域差について見て行くにあたり、出土数の少なさを補うため、青銅製祭祀具模造石製品、金属製装飾品、青銅製武器以外のその他の金属製武器、さらに金属製装飾品などが多く出土した方形周溝墓･円形周溝墓にまで研究対象を拡大し､それぞれの分布について分析を行った。分析の結果、弥生時代中期後半の段階で長野県の広い範囲で青銅製祭祀具模造石製品が確認されていることがわかった。さらに、北信地域からは銅鐸、青銅製武器をはじめ、研究対象がいずれも多く確認されている。東信地域からは銅鐸や青銅製武器以外の、多紐細紋鏡加工品や巴形銅器といったその他の青銅製祭祀具をはじめ、研究対象が一通り確認されており、特に金属製装飾品の出土数が多い。中信から南信の北部にかけての地域からは銅鐸や研究対象が確認されており、遺物の出土数は北信地域に次いで多い。南信地域からは青銅製祭祀具は確認されておらず、青銅製祭祀具模造石製品、その他の金属製武器が確認されているがいずれも少数で、一方、方形周溝墓は特に多く確認されている。分析の結果からそれぞれの地域によって少しずつ器種の出土が異なることがわかる。この結果を踏まえて、器種ごと、地域ごとに考察を行った。

長野県内では中期後半という早い段階から広い範囲で青銅製祭祀具模造石製品が出土していることから、青銅製祭祀自体は伝わっていたと考えられる。そして、北信地域では弥生時代中期後半の早い段階の銅鐸や青銅製武器が確認されており、更に研究対象の出土が特に多いことから、県内で最初に青銅製祭祀の文化と青銅製祭祀具を受容した地域と考えられる。東信地域からは装飾要素の強い青銅製祭祀具が確認されており、更に金属製装飾品の出土が特に多いことから、青銅製祭祀の文化は受容せず、青銅製祭祀具を装飾品として受容した地域と考えられる。中信から南信の北部にかけての地域からは弥生時代後期の銅鐸が出土していることから、北信地域に次いで青銅製祭祀の文化と青銅製祭祀具を受容した地域であると考えられる。南信地域は青銅製祭祀具が出土しておらず、青銅製祭祀の文化も青銅製祭祀も受容しなかった地域と考えられる。

文化の受容は、人の移動に由来すると考えられ、近畿地方から文化を携えて長野県にやってきた人がどこに伝えたのかによって伝わり方が異なるのは当然である。しかし、文化の流入には人の動きだけでなく、受け入れる側の体制によっても大きく左右される。長野県内の地域によって出土に差が出たのは、祭祀の文化を受け入れる体制が出来ていたかそうでないか、また、受容しようとしたかしなかったかの違いによると考えられる。

学校教育における考古学の活用―北陸における教育施設の実情をもとにー

細丸　善弘

平成 10 年の学習指導要領改訂によって、俗に言われる「ゆとり教育」が始まった。このことは学校教育の授業内容・方法に大きく影響を与え、このことが社会科教育における考古学資料の活用の新たな一歩となった。

同じくして埋蔵文化財センターや博物館における発掘調査量は減少の傾向を辿り、学芸員の新たな活用機会として学校が挙げられた。

本研究では、北陸における学校の博物館及びそれに類似する施設の活用実態を調査し、これからの改善点を提示した。

北陸三県の博物館及び埋文センター、小・中学校に実態調査の為のアンケート調査を実施した。博物館活用は小学校が圧倒的に多く、中学校は少なかった。出前授業では博物館活用に比べ両方とも半分以下の数値となった。中学校より小学校のほうが多いのは同様であった。しかし、活用してみたいという意見は小・中ともに 30%前後あり、活用に対して前向きであった。出前授業を活用しない理由を探っていくと、小学校では情報不足と内容があげられ、博物館利用ほどの魅力を感じていないことがわかった。中学校では時間不足であった。これは、中学校の社会科の指導内容が多岐に渡っており、教科書に沿った授業以外を計画する溶融がないことがわかる。

また、博物館側の回答から、博物館は学校等への出前授業一般的に行われていることが明らかとなった。また、その活用内容は「総合的な学習」が一番多く、次に「ゲストティーチャー」が挙げられており、まとまった時間での活用が多い結果となった。自己評価については好評がほとんどであった。また、出前授業の改善点は「内容」と「アピール」についてを挙げており、学校教育における活用増加を狙っていることが伺えた。

これらのアンケート結果を分析し挙げられた問題点は主に、小学校が活用したくても活用できない背景に、博物館活用（主に出前授業）で得られる学習内容の不一致、博物館の行う活動の情報不足であった。原因は博物館側の一方的な活用への意識。つまり博物館が学校の内情を知らないことにある。よって連携の薄さの原因は主に博物館側にあると考察した。これから改善しなければならない点は、博物館が学校の事を知ろうとすること、このような情報交換できる場をもつことである。

越中国の戦国期城下町
―富山県西部を中心とした戦国期城下町プランに関する考察―

増永佑介

富山県(越中国)における戦国期城下町の地域性をみていくため、越中国の戦国期城下町と周辺の集落の存続期間と様相から発生を、城下町の地割とそこに残る地名、文献から構造・景観をみることで越中国の戦国期城下町プランの考察を行った。

対象資料は、富山県西部に存在する戦国期城下町が中心であるが木舟城下町、蓮沼城下町、増山城下町である。また各戦国期城下町の周辺の集落も対象資料とした。

分析は以下のように行った。戦国期城下町とその周辺集落に分けて分析し、戦国期城下町は、城下町の発掘成果から遺跡の様相と存続期間を、文献資料からその歴史を、各城下町に残る地名をみていく。また城下町によって発掘から検出された地割(短冊型地割)を、道路に面している短辺を間口、それに対する長辺を奥行とし表にした。そしてこれらの表を X 軸に間口を、Y 軸に奥行きを設定しグラフ化した。また周辺の集落は、発掘成果から遺跡の様相と存続期間をみていった。

それらの分析から、各戦国期城下町における存続期間とその周辺の集落の存続期間から戦国期城下町の発生において周辺集落の移動・再編の、城下町に残る地名、歴史、発掘成果、地割の数値・グラフ化から各戦国期城下町の構造・景観の推定・考察を行った。

また、文献資料によるところが多いが、各戦国期城下町と道と川に関して、それぞれの機能と目的に関して考察を行い、それぞれの関係から、城主は重要な地を選び、そこに城下町をつくることで力をつけていく基盤とした。

これらの考察をふまえ、越中国の戦国期城下町プランの考察を行った。富山県西部の戦国期城下町を中心にみてきたが、越中国戦国期城下町は、各城下町の周辺集落に関する分析、発生、構造と景観の観点から 3 つに類型化される。

① 居館・居城が中心となって形成された城下町
② 集落が存在し、そこに居館・居城が付随して形成された城下町
③ 在地の戦国期城下町から織豊系城下町へと変化した城下町

この 3 つの類型は、対象としたそれぞれの戦国期城下町に対応し、①が木舟城下町、②が蓮沼城下町、③は増山城下町が該当し、発生、構造、景観から特徴をだし行った。また各戦国期城下町は存続期間を一部共有するものの、発生した時期は違うといえる。

これらの類型と城下町・道・川に関する考察から、越中国の戦国期城下町プランは、城主は重要な地を選び、そこに城下町をつくることで力をつけていく基盤とし、城下町は、発生の時期をみると類型は②→①→③と変遷するといえ、周辺の集落を再編していることから、在地の権力者より強い影響力を持つようになったといえる。

古代の音楽―出土琴の使用目的を中心として―

松木綾子

古代でも遺跡から様々な楽器が出土するが、琴は代表的な楽器の一つである。したがって、日本で初めて登呂遺跡出土の木製品が琴と認定されて以来、出土琴の分類を始め多くの研究がなされてきた。しかし、出土琴については弦の本数や演奏方法、使用目的など不明な点も多い。本論では、確認できた琴を集成し、それらの分布、分類、編年という分析方法や出土場所と共伴遺物から、琴がどのような場面で、そのような使用目的を持っていたのかを明らかにしていきたい。また、資料を補足するものとして弾琴埴輪も扱っている。

現在確認できた出土琴について出土場所や共伴遺物を中心に様々な情報を収集し、この集成をもとに、琴の細かな分類を行った。また、分布を見てみると、出土の中心は近畿地方であることがわかる。次に編年図を作成し、琴の形態や出土の変化をみた。縄文時代後期から平安時代までの琴の変遷をたどってみると、6 つの画期を見ることができた。

出土場所と共伴遺物をみてみると、出土場所はほとんどが集落の溝や旧河川であり、また、共伴遺物については、琴自体も木製品のため、木製品との共伴が多い。その他には土器類、石製品、植物遺体などがある。

以上の分析より考察を行った。琴の変遷や、琴の作りの変化、出土場所、共伴遺物、をもとに使用目的を考察した。これらのことから、先の研究での指摘にある通り、神事での霊器のような役割と宴での楽器としての役割を考えることができる。しかし、時期によっては祭祀に使われる頻度が増加する、また、使う人々が異なるなどの変化が見られる。さらに、時代が下るにしたがって、屋外からの使用から屋内への使用へと変化を追うことができる。

さらに琴の破棄方法から使用目的を、琴の作りの違いによって使用目的が異なるのかということについて考えた。琴の破棄方法から、特に祭祀に使用された可能性があるものがあること、琴の作りの違いよって使用目的が異なるということは言い難いということが分かった。

最後に復元された琴と弾琴埴輪から琴の演奏方法について考え、様々な演奏方法が考えられるが、右手で弦を掻き鳴らし、左手で弦を弾くという演奏方法が基本的な演奏方法であったということが言える。

八尾焼流通の様相—珠洲焼との比較を中心として—

村上　直

1984 年に京ヶ峰古窯跡の調査が行われ，八尾焼の存在が確認された。その後の発掘調査によって，生産年代は 12 世紀末から 14 世紀前半頃と想定された。徳大寺領宮河荘の推定域に位置する道場 I 遺跡から一遺跡として最も出土したことで，八尾焼と宮河荘の関係が考えられた。また，流通量は珠洲焼などの不足分を補完する程度とされ，八尾焼の終止は「生産性で勝る珠洲窯などにおされ自然消滅的に廃窯においこまれた。」とするのが一般的であった。そこで，本研究では宮河荘と他地域との比較，珠洲焼との関係をデータに基づいて考察することに焦点を置いて研究を行った。

出土地点の分布図を作成したところ，宮河荘域とされる神通川中流域に最も分布が集中していた。分布図の様相から，八尾焼は神通川を起点として主に河川を利用して流通したと考えられる。また，時期ごとの出土状況では 13 世紀前半の製品が圧倒的に多く生産性が大きく向上したと考えられる。この時期の製品は分布域も広がるが，山側に分布が多くみられることから，珠洲焼の海運を意識して商圏を広げたと考察した。

次に現富山市内の 8 遺跡を対象として，八尾焼と珠洲焼の破片計測・口径の出現頻度(甕・鉢のみ)による比較を行った。八尾焼は珠洲焼と比較しても甕の比率が非常に高く，甕が生産の中心であったことがわかった。しかし，その流通量は従来の指摘のように珠洲焼を補完する程度であると考えられる。一方，口径の出現頻度で鉢では両者は似た傾向を示すが甕では大きな違いが生じた。このことから八尾焼甕は珠洲焼の機能(用途)の補完も担ったと考え，そのため甕が生産の中心になったと考察したが使用例がわかる資料が非常に少ないため今後の検討を要する。

ここで，宮河荘の評価を加えた。荘域内に位置する遺跡群は 12 世紀から集落が展開された。また道場 I 遺跡は荘官クラスの人物との関わりがあった可能性があり，水運を利用した物流拠点であったと指摘される。これに八尾焼は日常消費財を生産していたことを踏まえると，宮河荘が集落の開発を行う際に日常消費財が必要になったため，京ヶ峰窯の操業を開始したと考えられる。また，宮河荘域以外でも八尾焼が出土していることから荘園の産業も兼ねていたとした。そして，道場 I 遺跡が開窯とほぼ同時期の 13 世紀に成立したことや前述の様相から八尾焼がこの遺跡に搬入されたと考えられる。

しかし，八尾焼の生産は 13 世紀前半にピークを迎えるものの，貯蔵具は耐久性に優れており頻繁に新しいものが必要ではないと思われることから，貯蔵具の需要が低下したのではないだろうかと考えた。そのため甕が中心である八尾焼を生産する必要性が低くなり，生産性が落ちたとみられる。また，宮河荘域の集落が 14 世紀中葉に最盛期を迎えたことから，集落の開発時期を過ぎて日常消費財を量産する必要がなくなったことも窯が操業を終える一つの要因と考えられる。このように，京ヶ峰窯の盛衰と宮河荘域の集落の変化が連動していると考えられる点については強調しておきたい。

X 把手付土器の伝播とその背景―唐草文系土器圏以西を中心に―

横幕　真

X 把手付土器は縄文時代中期後葉の曽利式土器の中に普遍的に存在する土器である。頸部に X 字状の把手をもち、器形的に無文の外反口縁や大きくふくらんだ胴部を特徴とする。こういった要素を有する土器群が唐草文系土器圏（長野県・中南信地域）以西に広がっていることは既に認識されていたことである。しかし、その様相を具体的に論じた研究はない。そこで、私は把手の形態分類をもとに土器の伝播と変容（各土器圏の中でどのように存在するのか、系統の整理）を分析し、土器伝播の背景について考察した。なお、各土器圏には器形的には X 把手付土器に酷似するものの把手形態が若干異なる土器群が存在する。そのため分類に際して主眼は X 字状把手に当てたが、他に橋状把手や眼鏡状把手などのつく土器群も X 把手付土器に関連する土器群として分析に含めた。

分析の結果、X 把手付土器（X 字状把手のつく土器群）に関しては唐草文系土器圏以西に搬入品は存在せず在地で模倣されたものばかりであることが分かった。X 字状把手に関連する土器群については、各土器圏で地域色がみられた。曽利式土器圏には、X 把手付土器が定型化する以前（曽利Ⅰ～Ⅱ式古段階）に橋状・眼鏡状・水煙文把手など多様な把手形態が散見される。既に X 把手付土器の器形も完成しているが、X 字状把手や文様構成は定型化していない。唐草文系土器圏にはこういった土器群の影響を受けた土器が存在する。しかし、東海系土器圏には X 把手付土器以外の土器群の伝播はあまりみられず、在地で変化したものが多いようである。

考察において、分布の西限を三重県・福井県に設定した。また、曽利式土器圏から東海系土器圏に至る移動ルートを仮定し、古代の道や河川といったネットワークを通じた交流を想定した。さらに、分析からは土器自体の移動が考えられないことから土器に関する情報のみが移動したと考えた。そして、情報移動の一例として埋甕風習の伝播をあげ、土器分布の西限が埋甕風習受容の西限に一致することからそこに何らかの文化的境界があったと考えた。

本論文を書き上げるにあたって、黒崎直教授・高橋浩二准教授には多くの御助言を頂いた。資料調査の際には、各地方自治体の関係諸機関の方々に多大な御協力を賜った。特に高橋健太郎氏・纐纈茂氏には縄文土器の知識から研究の動向に至るまで多方面から御指摘頂いた。そして富山大学考古学研究室 OB・OG の方々や先輩同輩後輩諸氏には計り知れないほどの御迷惑をおかけした。何より Chris との出会いは今後の人生を変える大きなアクシデントとなった。記して感謝を申し上げる。

平成 **20** 年度　富山大学考古学研究室 修士論文・卒業論文発表会

日時：平成21年3月14日13:00～
場所：富山大学人文学部6番教室

当日のスケジュールは以下の通りです。お問い合わせなどありましたら076-445-6195(富山大学考古学研究室)までご連絡ください。参加を希望される方はtomidaikouko@yahoo.co.jp までご連絡ください。聴講は無料ですので皆様ふるってご参加ください。

【修士論文】

高橋彰則「北陸における古墳時代中期の政治構造」
参考文献：高橋彰則 2008 「古墳時代中期における北陸の大型円墳と帆立貝形古墳について」『第 13 回東北・関東前方後円墳研究大会《シンポジウム》前期・中期における大型円墳の位置と意味　発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

【卒業論文】

横幕　真「X 把手付土器の伝播とその背景―唐草文系土器圏以西を中心に―」
参考文献：櫛原功一 2008 「曽利式土器の分布圏」『山梨県考古学協会誌』第 18 号

高畑郁美「弥生時代における祭祀の地域差～長野県の青銅製祭祀具を中心として～」
参考文献：金関恕・佐原真　1987　『弥生文化の研究８　祭と墓の装い』　雄山閣

坂田裕之「弥生絵画の伝達について―唐古・鍵遺跡、清水風遺跡中心論の検討―」
参考文献：大阪府立弥生文化博物館 2006 『弥生画帖―弥生人が描いた世界―』

松木綾子「古代の音楽―出土琴の使用目的を中心に―」
参考文献：山田光洋 1998 『楽器の考古学』同成社

佐藤雄太「栃谷南遺跡における瓦生産とその工人」
参考文献：富山市教育委員会 2002 『富山市栃谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ』

村上　直「八尾焼流通の様相―珠洲焼との比較を中心として―」
参考文献：森　隆 2006「越中八尾窯の流通に関する一様相」『陶磁器の社会史』桂書房

増永佑介「越中国の戦国期城下町―富山県西部を中心とした戦国期城下町プランに関する考察―」
参考文献：前川要 1990 『都市考古学の研究―中世から近世への展開―』柏書房

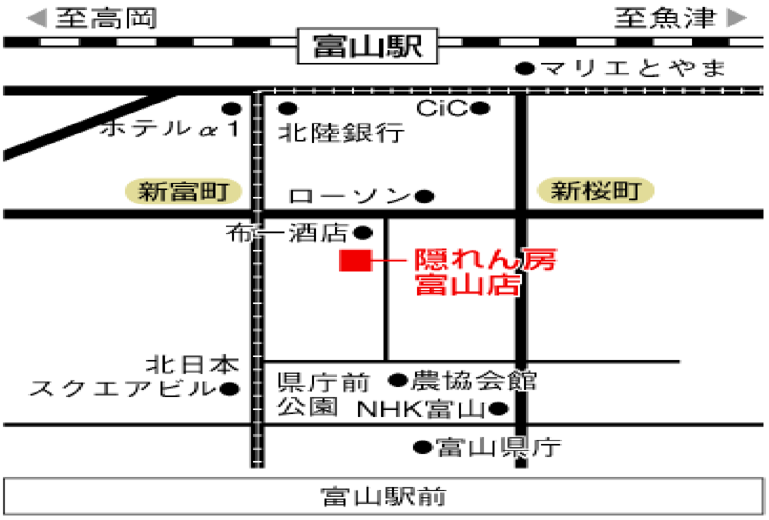
細丸善弘「学校教育における考古学の活用―北陸における教育施設の実情をもとに―」
参考文献：吉村健 1999「日本史学習における博物館の活用」『考古学研究』第 48 巻第 4 号

追い出しコンパのお知らせ

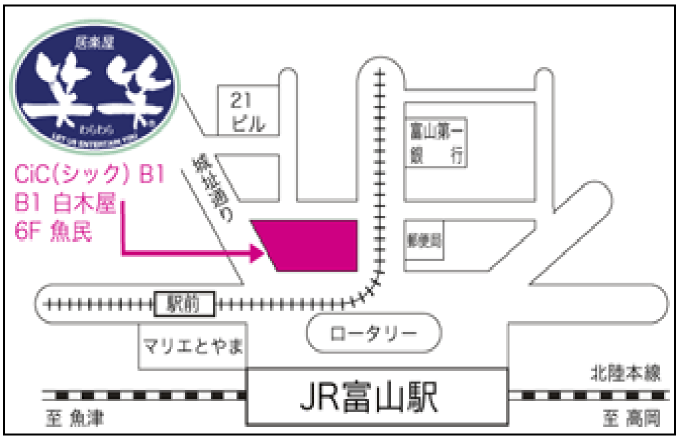
長い冬も終わりに近づきましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。
さて、富山大学考古学研究室では、3 月 14 日の修士論文・卒業論文発表会の後に追い出しコンパを行います。ご多忙中とは思いますが、参加していただければ幸いです。

日時：3月14日19:30～
場所：一次会･･･隠れん房　費用6400円
　　　二次会･･･笑笑　費用2500円
※参加を希望される方は3月9日までにtomidaikouko@yahoo.co.jpまでご連絡ください。
※費用は出席者の人数によって多少前後することがありますので、ご了承願います。

隠れん房地図



笑笑地図



編集後記

寒さもようやく衰えはじめ、だんだんと春らしくなってまいりましたが、いかがお過ごしでしょうか。

春は別れの季節です。お世話になった先輩方が卒業されるのは寂しいことです。またこの度は、先輩方にはお忙しい中、富大考古通信に原稿を提供してくださり、ありがとうございました。そして御卒業おめでとうございます。皆様の御健康と活躍のほど、陰ながらお祈りいたします。

そして春は出会いの季節でもあります。研究室には7人の新2年生を迎えることとなりました。パンフ作りで忙しない時期がまたやってきますが、新2年生と共に一丸となって頑張っていきたいと思います。

（鵜野千恵美・北村史織）

富大考古通信 第六号
配信日 2009年2月26日
編集・配信 富山大学人文学部考古学研究室
住所 930-8555 富山市五福3190
TEL 076-445-6195
留守番アクセス 4000 BOX番号 6195
HP http://www.geocities.jp/tomidaikouko/
メール tomidaikouko@yahoo.co.jp
※メールつきましては、迷惑メールと区別するためタイトルに必ず「富山大学考古学研究室」と入力して下さい。ご協力よろしくお願いいたします。